

猫汎白血球減少症

Feline panleukopenia: Feline Parvovirus Infection

猫汎白血球減少症は、猫の伝染病の中で最も感染率が高く、死亡率が高い病気のうちの一つです。猫伝染性腸炎とか猫パルボと呼ばれることもあり、世界中で発生しています。昔は猫ジステンパーとも呼ばれていましたが、現在はこの呼び名は用いません。

血液検査で白血球の数値が減少することが多々あるので猫汎白血球減少症と呼ばれています。

原因

原因は猫パルボウイルスの感染で、このウイルスは非常に抵抗性があり、感染力のつよい病原体です。病猫との直接的な接触や排泄物、だ液、吐物を口にすることによる経口感染で感染します。すべての猫科動物に感染し、アライグマやミンク等にも感染することがあります。

症状

潜伏期は2～10日程度です。感染すると高熱を出し、食欲がなくなり、激しい嘔吐、水様性下痢あるいは血便がみられます。ワクチン未接種の幼弱猫や老齢猫は2～3日で死亡することも多いものです。

激しい嘔吐と下痢で脱水が進み、二次感染による腸炎が悪化すると死亡率はさらに高くなります。

猫白血球ウイルスや猫免疫不全ウイルスに感染していると症状はさらに重篤になることがあります。

診断法

動物病院では、一般的に、ワクチン接種の有無などの問診、視診を行い、血液検査により白血球の数値を測定して減少していれば仮診断して治療を始めます。もちろん白血球の減少する原因はほかにもありますので、一般状態を知るために各種検査が必要になることもあります。最近では院内で糞便を用いた簡易判定が可能な場合もあります。確定診断を行うには、検査機関に依頼して抗体検査や特殊な方法によりウイルスを確認します。

治療法

今のところ猫パルボウイルスを殺せる薬はありません。一般的には細菌の二次感染を防止するために抗生物質の投与、症状にあわせて解熱剤、抗炎症剤、整腸剤、制吐剤、点滴や栄養剤の投与などの対症療法を行います。また、輸血や血清療法、インターフェロンが用いられることもあります。

ワクチン未接種の幼猫（特に5ヵ月以下の仔猫の死亡率は90%）や老猫は特に死亡率が高いので十分な看護が必要です。

自宅での看護法

治療は獣医師に任せるしかありませんが、自宅では、発病した猫は特に大量の猫パルボウイルスを排出しますので、他の猫への感染に十分注意してください。排泄物や食器、敷物などは焼却処分、あるいは消毒剤（次亜塩素酸ソーダなど）でよく消毒します。

退院（この病気の場合、病院によっては入院治療を行わないところもあります）あるいは通院できるようになったら、消化がよく栄養価の高い食餌を与え、獣医師から指示された投薬をきちんと行いましょう。また、暖かく十分な湿度を保った環境を整えてあげ、汚物などはこまめに処理し清潔な環境を保つことが重要です。動物病院には液体やペースト状の栄養剤などもありますので、食欲がない時には主治医の先生に相談してこれらを処方してもらおうといいでしょう。

予防法

ワクチン接種で予防するしかありません。猫パルボウイルスが猫の体内に侵入しても、ワクチンにより免疫ができていれば発病することはありません。猫ウイルス性鼻気管炎、猫カリシウイルス感染症との3種混合ワクチンは必ず接種しましょう。今時猫を飼育してワクチンを接種しないなんて、もってのほか、このような人はまだ猫を飼育するご身分ではありません。

メモ

この病気は伝染性が強いのでワクチンを接種していないとペットホテルや動物病院でも預かりや入院できないところがほとんどです。仔猫が生まれたら、必ず獣医師に相談して適切なワクチンプログラムと追加接種を行いましょう。

母猫が妊娠中に感染すると、流産や、生まれてくる仔猫に小脳形成不全が起こることがあります。病猫は回復しても数ヵ月間ウイルスを排出し続け、新たな感染源になる可能性がありますので、他の猫との接触や新たな猫の導入には特に注意が必要です。